

# 大正大学蔵『源氏物語』翻刻(桐壺)

## 大正大学蔵『源氏物語』について

本学所蔵の『源氏物語』は、飛騨地方の地主で、素封家でもあった旧家に代々伝わったもので、平成九年本学所蔵となった。写本は「青表紙本」系の本文で、全五十四帖が完全な形で揃っており、定家以降、数多くの写本が伝えられるうちでも、善本として評価の高い室町時代後期の「大島本」「三条西家本」とほぼ同年代に筆写されたものである。前太政大臣近衛政家ほかの能筆家による寄合書で、十四帖の巻々に書写校合奥書があり、筆写者の官職や花押が記されており、延徳二年(1490)・明応二年(1493)の書写とする記事が多数見られる。これらの奥書を信するならば、「大島本」「三条西家本」とほぼ同年代の筆写で、しかも完本であることから、『源氏物語』の数ある伝本の中でもきわめて貴重な写本といえよう。

写本の五十四冊は黒漆塗りの専用の二重箱入り(四段箆筒入り)となっている。各引き出しには中央上に金泥で数字が記され、右端から収納冊の巻名が同じく金泥で入っている。一段目には桐壺から滯標まで、二段目には蓬生から梅枝まで、三段目には藤裏葉から竹河まで、そして四段目には宇治十帖の巻名が記されている。九代古筆了意(天保五年没)の極めによれば、これらは江戸時代初期の学者・能筆家として知られた角倉素庵(1571～1632)の筆とされよう。

写本の五十四冊は、艶出紫色無地原装紙の表紙で、縦26.2cm×横17.5cmとなっており、さらに表紙の中央上部には朱色地に金銀泥彩画題簽(縦12.5cm×横3.3cm)が貼付されている。題字は全五十四冊同筆で、了意の極めによれば、これらは青蓮院宮尊鎮法親王の筆とされている。綴じ方は列帖装(四孔・白糸)。前後見返しとも白紙。本文の料紙には鳥の子が用いられている。前遊紙一丁をおいて二丁より起筆し、片

大正大学蔵『源氏物語』翻刻(桐壺)

大場 朗

魚尾 孝久

面九行、行二十字内外、和歌は改行二字下げ二行書きで、二行目の字下げはない。ただし、桐壺は三才から、蓬生は二ウ、絵合は一ウより起筆。和歌は藤裏葉のみ二行目も字下げしている。また、桐壺巻墨付き本文一丁表の料紙に金泥彩画が施され、そこに「此壹部加一覽 諸家之筆跡無其疑 委見于奥書畢 春三月上旬 花押」と記されている。

写本の五十四冊中の十四冊には、書写者による書写校合奥書がある。その中で特に長い奥書を持つのが夢浮橋巻で、そこにはこの『源氏物語』の書写の経緯が簡単に述べられている。

源氏物語五十余帖之書寫者蓋是／太平中書二三ヶ年之經營也相分右／筆於諸家擬秘全部於吾室感其／志推斯人所謂詞林之良工兼弓／馬之道藝苑之庸才致火牛之／謀者乎余書功當最末卷之故聊／述其旨趣而已／時明應二載仲冬下旬記之／諫議大夫藤基綱

書写者は、当時歌人で能書家でもあった正三位参議姉小路基綱(1441～1504)。寄合書では、通例として、第一巻と最終巻とは上位者の筆になることが多く、また、最終巻は書写の企画者が書くことが多いことから、基綱はこの書写に深く関わっていたことが知られる。この奥書によれば、明應二年十一月下旬に全巻終了したことが知られる。

本写本に関する調査研究は皆無に等しく、わずかに上野英子氏の基礎的な書誌の報告(「大正大学蔵『源氏物語』について」『源氏研究』第七号 翰林書房 二〇〇二年四月)と唐暁可氏(「大正大学附属図書館蔵『源氏物語』攷へ」『玉鬘』における本文の重出)『研究と資料』第五七輯 平成十九年八月)、友井田未来氏(「大正大学蔵『源氏物語』本文研究―「帚木」巻を中心に―」『国文学試論』第一七号 平成一九年三月)

があるのみである。早くから総合巻と玉鬘巻に錯簡が指摘されるなど、今後本文や書写者などをはじめとして取り組まなければならない課題は多く、研究の深化発展が期待される。なお、本解説を書くに当たり、上野英子氏のご報告を参照させていただいた。記して厚く感謝申し上げます。

(大場 朗)

### 翻刻の経緯

一本翻刻は、大正大学附属図書館によつて貴重書画像として公開（ホームページ）されている大正大学本源氏物語を、パソコン教室でのリーディングの形式によつて授業取りいれたものである。

一 翻刻は、平成二十年より日本語日本文学コースの授業「古典文学研究」における翻刻を基にして、それぞれ巻別の翻刻担当者によつて精査したものである。

一 翻刻にあたっては、変体仮名の字母漢字も並列表記した。

一 当該授業は現在もおこなわれており、翻刻されたものは順次公開していく。

### 大正大学本源氏物語翻刻凡例

一 本翻刻は、大正大学附属図書館貴重書画像公開（ホームページ）から翻刻し、不明瞭なところは原本と照合する方法によつた。

一 翻刻における頁の表記は、検索の便宜を図るため、ホームページにおける頁数を使用して、さらにその左右を明記した。

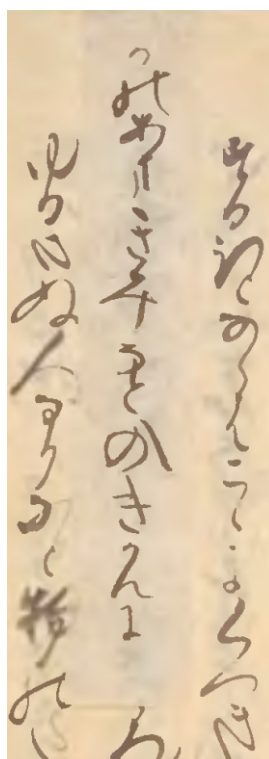
例【桐壺】27右

一 翻刻にあたっては、「変体仮名字母漢字（青色）」と「平仮名（黒色）」を並列表記した。ホームページのみ。

例 以徒蓮乃御時尔可女御更衣安未多左不良  
いつれの御時にか女御更衣あまたさふら

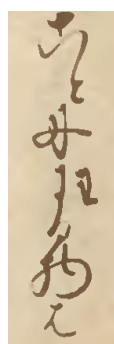
一 附箋によつて添付されている場合は、ホームページにしたがい、附箋のみの頁と本文の頁とにわけて翻刻をした。

例 附箋（可能安万幾美奈止乃幾可无尔）  
（かあまきみなとのきかんに）



一 行間の文字および補入文字は（ ）にて本文に入れた。

例 古止丹尔（王）留物者  
ことに（わ）る物は



一 見せ消ちは、そのまま表記して、「――」取り消し線を伏した。

例 「かゆ」

一 字母漢字は、旧字と略字が混用されているが、翻刻にあたっては通行体表記とした。

例 「禮」↓「礼」 「傳」↓「伝」

一 漢字は、旧字体と略字体とが混用されているが、通行体表記とした。

例 「國」↓「国」 「繪」↓「絵」

「哥」↓「歌」 「佛」↓「仏」

「聲」↓「声」

桐壺

【桐壺】3左

此壹部加一覽諸家之  
筆跡無是疑委見于奥  
書畢

春三月上旬 花押

一 当て字は、そのまま表記した。

例 「さか月」(杯) 「伊与」(伊予)

一 当翻刻における巻別の担当責任者は、次の通りである。

「桐壺」 大坪 俊介

(魚尾 孝久)

【桐壺】 4右

以徒連乃御時尔可女御更衣安末多左不良  
いつれの御時にか女御更衣あまたさふら

比給介流中仁以止屋武己止奈起、者尔八安良  
ひ給ける中にいとやむことなき、はにはあら

奴可寸久礼天止起女幾給阿利介利波之免  
ぬかすくれてときめき給ありけりはしめ

与利我者止思安可利太末部留御可多く、女左  
より我はと思あかりたまへる御かたくめさ

満之幾物尔遠止之女曾祢三堂末不於奈之  
ましき物にをとしめそねみたまふおなし

本止曾連与利下羅宇乃更衣多知八末之天  
ほとそれより下らうの更衣たちはまして

也寸可良春朝夕乃宮徒可部尔徒計天毛人  
やすからず朝夕の宮つかへにつけても人

乃心越宇己閑之恨遠於不川毛利尔也安利  
の心をうこかし恨をおふつもりにやあり

介武以止安川之久奈利由幾毛乃心本曾遣丹  
けむいとあつしくなりゆきもの心ほそけに

【桐壺】 4左

【桐壺】 5右

里可知奈留遠以与く安可春安者礼奈留物尔  
里かちなるをいよくあかすあはれなる物に

於毛本之天人乃曾志利遠毛衣波、閑良世  
おもほして人のそしりをもえは、からせ

給者春世乃多女之仁毛奈利奴部幾御毛天  
給はす世のためしにもなりぬへき御もて

那之奈利上達部宇遍人奈止毛安以奈久女  
なしなり上達部うへ人なともあいなくめ

遠曾波免徒、以止末八由幾人乃御於本衣  
をそはめつゝいとまはゆき人の御おほえ

奈利毛路古之仁毛閑、流事乃於古利仁  
なりもろこしにもかゝる事のおこりに

己曾世毛見多礼安之閑利介礼止屋宇く阿  
こそ世もみたれあしかりけれどやうくあ

女能下仁毛安知幾奈宇人乃毛天奈也三久  
めの下にもあちきなう人のもてなやみく

佐尔那利天楊貴妃乃多女之毛比幾出徒  
さになりて楊貴妃のためしもひき出つ

【桐壺】 5左

遍宇那利行尔以止波之多奈起事於本可礼止  
へうなり行にいとはしたなき事おほかれと

加多之氣奈幾御心者部乃多久比奈起遠多能三  
かたしけなき御心はへのたくひなきをたのみ

尔天末之良飛給知、大納言八那久奈利天者、  
にてましらひ給ち、大納言はなくなりては、

北乃可多奈无以尔之部乃人能与之安類尔天於  
北のかたなんいにしへの人のよしあるにてお

也宇知久之佐之安多利天世乃於本衣者奈也  
やうちくしさあたりて世のおほえはなや

可那留御閑多く、尔毛於止良春奈尔事乃  
かなる御かたくにもおとらすなに事の

起之幾遠毛毛天那之給介礼止利多天、  
きしきをもてなし給けれどとりたて、

者可く之幾御宇之路三奈介礼八己止、安留時者  
はかくしき御うしろみなければこと、ある時は

奈遠与利所奈久心本曾氣奈利左起能世尔毛  
なをより所なく心ほそけなりさきの世にも

【桐壺】6右

御知幾利也婦可、里介无世尔奈久起与良奈  
御ちきりやふか、りけん世になくきよらな

流玉乃於乃己美己佐部宇末礼給奴以徒之可  
る玉のおのこみこさへうまれ給ぬいつしか

止心毛止奈閑良世給天以曾幾満以良世天  
と心もとなからせ給ていそきまいらせて

御覽寸留尔女川良可奈留知己乃御可多知奈利  
御覽するにめつらかなるちこの御かたちなり

一乃見古八右大臣乃女御乃御者良尔天与勢  
一のみこは右大臣の女御の御はらにてよせ

於毛久宇多可比奈起末宇希乃君止世尔毛天  
おもくうたかひなきまうけの君と世にもて

閑之徒幾起己由連止古乃御尔本比耳八  
かしつききこゆれとこの御にほひには

奈良比給遍久毛安良左利介礼八大可多能屋无  
ならひ給へくもあらさりければ大かたのやん

古止奈起御思尔天己乃君遠波和多久之  
ことなき御思にてこの君をはわたくし

【桐壺】6左

物尔於本之閑之徒幾給事可幾利那之  
物におほしかしつき給事かきりなし

母君八波之免与利遠之奈部天能宇部宮徒  
母君ははしめよりをしなへてのうへ宮つ

可部之給部幾、波尔八安良佐利幾於本衣以止  
かへし給へき、はにはあらさりきおほえいと

屋无己止奈久上春女可之介礼止和利奈久末徒  
やんことなく上すめかしけれとわりなくまつ

者世給安末利尔佐留部幾御安曾比乃於利く  
はせ給あまりにさるへき御あそひのおりく

何事仁毛由部安留事乃布之く、尔八末川  
何事にもゆへある事のふしくにはまつ

末宇乃本良世給安留時尔八於本止乃古毛里  
まうのほらせ給ある時にはおほとこのこもり

寸久之天屋閑天左不良者世給比奈止安奈  
すくしてやかてさふらはせ給ひなとあな

閑地尔於末部左良春毛天奈左世給之本止尔  
かちにおまへさらすもてなさせ給しほとに

【桐壺】 7右

於乃徒可良可路幾可多尔毛美衣之遠己能美己  
おのつからかろきかたにもみえしをこのみこ

宇末礼給天乃知八以止心己止尔於毛本之遠起  
うまれ給てのちはいと心ことにおもほしをき

天多礼八坊尔毛与宇世春八己乃美己能為給  
てたれば坊にもようせすはこのみこのみ給

遍幾奈女利止一乃美己乃女御八於本之宇多  
へきなめりと一のみこの女御はおほしうた

閑部利人与利佐幾尔末以利給天也武己止  
かへり人よりさきにまいり給てやむこと

奈幾己止那幾御思日奈部天奈良春見己多知  
なきことなき御思ひなへてならすみこたち

那止毛於者之満世波己乃御可多能御以左免遠  
なともおはしませはこの御かたの御いさめを

乃三曾奈越王川良者之宇心久留之宇於毛比幾  
のみそなをわつらはしう心くるしうおもひき

己衣左世給介留閑之己起御可計遠八堂能三起  
こえさせ給けるかしこき御かけをはたのみき

【桐壺】 7左

古衣奈可良遠止之女幾春遠毛止免給人八於保  
こえなからをとしめきすをもとめ給人はおほ

久和可身八閑与波久物者可奈幾安利左満耳  
くわか身はかよはく物はかなきありさまに

天奈可く奈留毛乃於毛比遠曾之給御川本称  
てなかくなるものおもひをそし給御つほね

者幾利徒本奈利安末多乃御可多く遠寸起  
はきりつほなりあまたの御かたくをすき

左世給徒く比末奈幾御末恵和多利尔人能御  
させ給つひまなき御まゑわたりに人の御

心遠徒久之多末不毛計尔古止八利止美衣多利  
心をつくしたまふもけにことほりとみえたり

末宇乃本利多末婦耳毛安末利宇知之幾類  
まうのほりたまふにもあまりうちしきる

於利く八字知波之和多止乃古閑之己乃  
おりくはうちはしわたとのこかしこの

美知尔安屋之幾和左遠之川御遠久利武可部  
みちにあやしきわさをしつ御をくりむかへ

【桐壺】 8右

乃人能幾奴乃春曾堂衣可多久滿左奈幾已止  
の人のきぬのすそたえかたくまさなきこと

止毛安利又安留止幾八衣左良奴女多宇能止越  
ともあり又あるときはえさらぬめたうのとを

左之己免古奈多加那多心遠安者世天者之太  
さしこめこなたかなた心をあはせてはした

奈女和川良者世給止幾毛於本可利己止尔不札  
なめわつらはせ給ときもおほかりことにふれ

天可春志良春久留之起己止乃三滿左札八以止以多  
てかすしらすくるしきことのみまされはいといた

宇於毛比王飛多留越以止、安八札止御良无之天  
うおもひわひたるをいと、あはれと御らんして

後涼殿尔毛止与利佐不良比給更衣乃左宇  
後涼殿にもとよりさふらひ給更衣のさう

之遠本可尔宇徒左世給天宇部川本尔太末  
しをほかにうつさせ給てうへつほねにたま

者須曾乃宇良見末之天屋良无可多奈之己乃  
はずそのうらみましてやらんかたなしこの

【桐壺】 8左

見己美徒尔奈利給止之御者可滿幾乃己止一能  
みこみつになり給とし御はかまきのこと一の

宮乃多天末川利之尔遠止良寸久良徒可左於左  
宮のたてまつりしにをとらすくらつかさおさ

女止能、物遠川久之天以三之宇世左勢給曾礼  
めとの、物をつくしていみしうせさせ給それ

耳川計天毛与乃曾之里能三於本可連止己乃  
につけてもよのそしりのみおほかれとこの

美己乃於与春氣毛天遠八寸留御可多知心者部  
みこのおよすけもてをはする御かたち心はへ

安利可多久女川良之幾滿天美衣給遠曾祢三  
ありかたくめつらしきまでみえ給をそねみ

阿部給者須物乃古、呂志利給人八可、類人毛  
あへ給はず物のこゝろしり給人はかゝる人も

世尔以天於者寸留毛乃奈利介利止安左滿之  
世にいておはするものなりけりとあさまし

幾末天女遠越止路可之給曾乃止之能夏三也  
きまでめををとりかし給そのとしの夏みや



【桐壺】9右

春所者可那幾心知耳和徒良比天末可天奈无  
す所はかなき心ちにわつらひてまかてなん

止之給遠以止満左良尔由留左世給者春登之  
とし給をいとまさらにゆるさせ給はすとし

古路川祢乃安徒之佐尔奈利給部連八御女奈礼  
ころつねのあつしきになり給へれば御めなれ

天奈越志者之古、路美与止乃多末波春流  
てなをしはしこゝろみよとのたまはする

仁日く、尔於毛利給天多、五六日能本止尔  
に日くにおもり給てた、五六日のほとに

以止与者宇奈礼八者、幾見奈久く、曾宇之天  
いとよはうなれはは、きみなくく、そうして

末可天佐世多天末川利給可、流於利尔毛阿留  
まかてさせたてまつり給かゝるおりにもある

満之幾波知毛己曾止心川可比之天見己遠  
ましきはちもこそと心つかひしてみこを

八止、免太天末川利天忍比天曾以天多末不  
はとゝめたてまつりて忍ひてそいてたまふ

【桐壺】9左

可幾利安礼八左乃三毛衣止、免左世給者春  
かきりあれはさのみもえとゝめさせ給はす

御覽之多尔遠久良奴於本川可奈左越以不可多  
御覽したにをくらぬおほつかなさをいふかた

那久於本左類以止尔本比也可耳宇徒久之遣  
なくおほさるいとほひやかにうつくしけ

奈留人乃以多宇於毛也世天以止安者連止  
なる人のいたうおもやせていとあはれと

物遠思比之三奈可良己止尔以天、毛起己衣屋良  
物を思ひしみなからことにいて、もきこえやら

春安留可奈幾可尔幾衣以利徒、物之堂末婦遠  
すあるかなきかにきえいりつゝ物したまふを

御良无寸留尔幾之可多由久寸惠八於本之女左礼  
御らんするにきしかたゆくすゑはおほしめされ

春与呂川乃事遠那久く、知幾利能多末八春  
すよろつの事をなくく、ちきりのたまはす

連止御以良部毛衣起己衣給者須末三奈止毛  
れと御いらへもえきこえ給はすまみなとも

【桐壺】10右

以止多遊計尔天以止、奈与く止我可乃介之起  
いとたゆけにていと、なよくと我がのけしき

尔天布之多礼八以可左満尔止於本之女之満止  
にてふしたれはいかさまにとおほしめしまと

者留天久留末乃宣旨奈止乃多末者世天毛  
はるてくるまの宣旨などのたまはせても

又以良世給天八佐良尔衣由留左世給者須可幾利  
又いらせ給てはさらにはゆるさせ給はずかきり

安良无美知尔毛遠久礼左起多、之止知起良勢  
あらんみちにもをくれさきた、しとちきらせ

給希留遠佐利止毛宇知春天、者衣由起屋  
給けるをさりともうちすて、はえゆきや

良之止乃多末波春留遠八女毛以止以三之止  
らしとのたまはするをは女もいといみしと

美多天末川利帝  
みたてまつりて

可幾利止天和可類、美知乃可奈之幾尔以可  
かきりとてわかる、みちのかなしきにいか

【桐壺】10左

末本之幾波命奈利介利以止可久思不給部末之  
まほしきは命なりけりいとかく思ふ給へまし

加八止以止毛多衣徒、幾己衣末本之遣那留  
かはといともたえつ、きこえまほしけなる

己止八安利気奈礼止以止久留之計尔太由遣奈  
ことはありけなれといとくるしけにたゆけな

連八閑久奈可良止毛閑久毛奈良无遠御覽之  
れはかくなからともかくもならんを御覽し

者天武止於本之女春尔介不者之武部幾以乃  
はてむとおほしめすにけふはしむへきいの

里止毛左留部幾人く、宇計給者礼留己与  
りともさるへき人く、うけ給はれるこよ

飛与利止起己衣以曾可世八和利奈久於毛本之  
ひよるときこえいそかせはわりなくおもほし

奈可良満可天左勢給不御武祢乃三川止布多  
なからまかてさせ給ふ御むねのみつとふた

閑利天徒遊末止路末礼春阿可之閑祢  
かりてつゆまとろまれすあかしかね

【桐壺】 11右

左世給御川可比乃遊幾可不本止毛奈起尔猶  
させ給御つかひのゆきかふほともなきに猶

以不世佐遠可幾利奈久乃多末者世徒類遠  
いふせさをかきりなくのたまはせつるを

夜中宇知寸久留本止尔奈无太衣者天給奴留  
夜中うちするほとになんたえはて給ぬる

止天奈幾佐者計者御川可比毛以止阿衣奈久  
とてなきさはけは御つかひもいとあえなく

天可部利末以利奴幾己之女須御心未止比奈尔已止  
てかへりまいりぬきこしめす御心まとひなにごと

毛於本之女之和可礼須己毛利遠者之末須三古  
もおほしめしわかれすこもりをはしますみこ

八可久天毛以止御覽世末本之介礼止可、留本止  
はかくてもいと御覽せまほしけれとかゝるほと

耳左不良比給連以奈幾己止奈礼者末可天給  
にさふらひ給れいなきことなれはまかて給

奈无止春那尔已止可安良无止毛於毛本之多良春  
なんとすなにごとかあらんともおもほしたらす

【桐壺】 11左

左婦良布人く乃奈幾満止比宇遍毛御奈三多  
さふらふ人くのなきまとひうへも御なみた

乃飛末那久奈可連於者之末春遠安屋之止見  
のひまなくなかれおはしますをあやしと見

太天末川利給部留遠与路之幾己止尔堂耳  
たてまつり給へるをよろしきことにたに

閑、流王可礼乃可奈之加良奴八奈幾和左奈留越  
かゝるわかれのかなしからぬはなきわさなるを

満之天安八連尔以不可比奈之可幾利安礼八連以  
ましてあはれにいふかひなしかきりあればはい

乃左本宇尔於左免多天末徒留越者、北乃方  
のさほうにおさめたてまつるをは、北の方

於奈之介不利仁毛乃本利奈无止奈幾己閑礼  
おなしけふりにものほりなんとなきこかれ

給天御遠久利乃女房能久留満耳志多飛  
給て御をくりの女房のくるまにしたひ

乃利給天於多幾止以不所尔以止以可女之宇  
のり給ておたきといふ所にいといかめしう

【桐壺】 12右

曾乃左本宇志多留爾於者之川幾多留心知以可者  
そのさほうしたるにおはしつきたる心ちいかは

閑利可八安利介武無奈之幾御可良遠三留く  
かりかはありけむむなしき御からをみるく

奈遠於者寸留物止思不可以止可比奈介礼八者以止  
なをおはする物と思ふかいかひなければはいと

奈利給者武遠美多天末徒利天以末者奈幾  
なり給はむをみたてまつりていまはなき

人止比多布留爾於毛比奈利奈无止佐可之  
人とひたふるにおもひなりなんとさかし

宇乃多末比徒連止久留末与利毛於知奴部宇  
うのたまひつれとくるまよりもおちぬへう

末路比多末部八佐者思日川可之止人く毛天  
まろひたまへはさは思ひつかしと人くもて

王川良比幾已由宇知与利御川可比安利三位農  
わつらひきこゆうちより御つかひあり三位の

久良為遠く久利給与之勅使幾天曾能宣命  
くらゐをくくり給よし勅使きてその宣命

【桐壺】 12左

与武奈无可奈之(幾) 古止奈利介流女御止多尔以者  
よむなんかなし(き) ことなりける女御とたには

世春奈利奴留可安可須久知於之字於本佐留礼八  
せずなりぬるかあかすくちおしうおほさるれは

以末比止幾佐三乃久良為遠多尔止於久良勢  
いまひときさみのくらゐをたにとおくらせ

給奈利介利古礼尔川計天毛尔久三給人く  
給なりけりこれにつけてもにくみ給人く

於本可利毛乃思日志利給八佐末可多地奈止能女天  
おほかりもの思ひしり給はさまかたちなどのめて

太可利之事心者世乃奈多良可尔女屋寸尔尔久  
たかりし事心はせのなたらかにめやすくにく

三閑多奈可利之己止奈止以末曾於本之以徒類  
みかたなかりしことなといまそおほしいつる

左満安之幾御毛天奈之由部己曾寸計奈宇  
さまあしき御もてなしゆへこそすけなう

曾祢三給之可人可良乃安八礼尔奈左氣安利之  
そねみ給しか人からのあはれになさけありし

【桐壺】 13右

御心遠宇部乃女房奈止毛己飛志乃飛安遍利  
御心をうへの女房などもこひしのひあへり

奈久天曾止八閑、流於利尔也止美衣多利波可  
なくてそとはかゝるおりにやとみえたりはか

那久日己呂寸幾天後乃和左奈止耳毛己  
なく日ころすきて後のわさなどにもこ

末閑尔登不良者世給本止不留末、仁世无閑多  
まかにとふらはせ給ほとふるまゝにせんかた

奈宇可奈之宇於本左類、耳御可多く能御  
なうかなしうおほさるゝに御かたくの御

止乃為奈止毛太衣天之給者春多、奈三多尔  
とのゐなともたえてし給はすたゝなみたに

比知天安可之久良佐勢給部八三多天末徒留  
ひちてあかしくらさせ給へはみたてまつる

人左部露介起秋奈利奈幾安止末天人乃  
人さへ露けき秋なりなきあとまで人の

武祢安久末之可利介留人乃御於本衣可奈止楚  
むねあくましかりける人の御おほえかなとそ

【桐壺】 13左

弘徽殿奈止耳八奈遠由留之奈宇能多末比介留  
弘徽殿などにはなをゆるしなうのたまひける

一乃宮遠美多天末川良勢給尔毛和可三也農  
一の宮をみたてまつらせ給にもわかみやの

御己比之左乃三於毛本之以天川、志多之起女  
御こひしさのみおもほしいてつゝしたしき女

房御女乃止奈止遠川可八之徒、安利佐末遠幾  
房御めのとなどをつかはしつゝありさまをき

己之女須野王幾多知天仁者可尔波多左武  
こしめす野わきたちてにはかにはたさむ

幾由不久連乃本止川祢与利毛於本之以川留己止  
きゆふくれのほとつねよりもおほしいつること

於保久天由計比乃命婦止以不遠徒可者須  
おほくてゆけいの命婦といふをつかはす

由不徒久与乃於可之幾本止尔以多之太天佐勢  
ゆふつくよのおかしきほとにいたしたてさせ

給天屋可天奈可免於八之末須閑屋宇能於利  
給てやかてなかめおはしますかやうのおり

【桐壺】 14右

御安曾比奈止世左勢給之尔己止奈留毛乃、  
御あそひなとせさせ給しにことなるもの、

祢遠可起奈良之者可奈久起己衣以川留己止乃  
ねをかきならしはかなくきこえいつることの

者毛人与利八古止奈利之遣者比可多知能於毛  
はも人よりはことなりしけはひかたちのおも

可計耳徒止曾比天於本左留、仁毛也三能宇  
かけにつとそひておほさるゝにもやみのう

徒、耳八奈遠於止利介利命婦可之己尔満可天  
つゝにはなをおとりけり命婦かしこにまかて

川幾天可止比幾以留、与利計者飛安者連奈利  
つきてかとひきいるゝよりけはひあはれなり

屋毛免寸三奈礼止人日止利乃御閑之川起尔  
やもめすみなれと人ひとりの御かしつきに

止可久川久呂比多天、女也春起本止尔天寸久之  
とかくつくろひたてゝめやすきほとにてすくし

給比川留遠也三尔久礼天布之多末部留本止丹  
給ひつるをやみにくれてふしたまへるほとに

【桐壺】 14左

草毛多可久奈利野王幾尔以止、安礼多留心知之  
草もたかくなり野わきにいとゝあれたる心ちし

天月影者可利曾屋部武久尔左波良春佐之  
て月影はかりそやへむくらにさはらすさし

以利多留美奈三於毛天耳於呂之天者、起三  
いらたるみなみおもてにおろしてはゝきみ

毛止見尔衣物毛乃多末波春以末、天止末利  
もとみにえ物ものたまはすいまゝてとまり

侍可以止字幾可、流御川可比乃与毛幾不能川遊  
侍かいとうきかゝる御つかひのよもきふのつゆ

王計以利給不尔徒気天毛以止者川可之奈无  
わけいり給ふにつけてもいとつかしなん

登天計尔衣太不末之久奈以給末以利帝盤  
とてけにえたふましくない給まいりては

以止、心久留之宇心幾毛、徒久留也宇耳奈无止  
いとゝ心くるしう心きもゝつくるやうになんと

内侍乃春計乃曾宇之給之遠毛能思比給遍  
内侍のすけのそうし給しをもの思ひ給へ

【桐壺】 15右

志良奴心知尔毛計尔己曾以止之乃比可多久侍介礼  
しらぬ心ちにもけにこそいとしのひかたく侍けれ

止天屋、多女良比天於本世己止徒多部幾己由  
とてや、ためらひておほせことつたへきこゆ

志者之八夢可止乃三多止良連之遠也宇く  
しはしは夢かとのみたとられしをやうく

思日志川未留仁之毛左武部幾可多奈久太衣  
思ひしつまるにしもさむへきかたなくたえ

可多起八以可尔春部幾和左仁可止毛止比安者春  
かたきはいかにすへきわさにかともとひあはす

遍幾人多尔奈幾遠忍比天八衣末以利給  
へき人たになきを忍ひてはえまいり給

比奈无也和可宮能以止於本川可奈久露計幾  
ひなんやわか宮のいとおほつかなく露けき

奈可尔寸久之給毛心久留之宇於本左類、越  
なかにすくし給も心くるしうおほさるゝを

止久末以利給部奈止者可く之宇毛能多末八世  
とくまいり給へなとはかくしうものたまはせ

【桐壺】 15左

屋良春武世可部良世給川、閑川八人毛心与波久  
やらすむせかへらせ給つゝ、かつは人も心よはく

三多末川良无止於本之川、末奴尔之毛安良  
みたてまつらんとおほしつゝ、まぬにしもあら

奴御介之幾能心久留之佐尔宇希給者利毛者  
ぬ御けしきの心くるしきにうけ給はりもは

天奴世尔天奈无満可天侍奴留止天御不三  
てぬやうにてなんまかて侍ぬるとて御ふみ

堂天末川留女毛美衣侍良奴尔可久加之己起  
たてまつるめもみえ侍らぬにかくかしこき

於本世己止遠比可利尔天奈无止天見多末婦  
おほせことをひかりにてなんとて見たまふ

本止部八寸己之宇知末幾留、己止毛也止末  
ほとへはずこしうちまきるゝこともやとま

知寸久須月日尔曾部天以止志乃比可多起八  
ちすくす月日にそへていとしのひかたきは

和利奈幾和左尔奈无以者計奈幾人毛以可尔止  
わりなきわさになんいはけなき人もいかにと

【桐壺】 16右

思日屋利徒、毛路止毛尔春久、末奴於本川可奈  
思ひやりつゝもろともにはく、まぬおほつかな

佐遠以末八那遠普乃可多見尔奈春良部天毛  
さをいまはなを昔のかたみになすらへても

乃之多末部奈止己末也可尔閑、世給部利  
のしたまへなとこまやかにかゝせ給へり

宮幾乃、露不幾武春不風乃遠止尔己  
宮きの、露ふきむすふ風のをとにこ

者起可毛止遠思日己曾也連止安礼止衣美多  
はきかもとを思ひこそやれとあれとえみた

末比者天須以乃知奈可左能以止川良宇於毛不  
まひはてすいのちなかさのいとつらうおもふ

多末部志良類、耳松乃於毛者无己止堂耳  
たまへしらるゝに松のおもはんことたに

者川可之宇思給侍礼八毛、之起尔由幾可飛  
はつかしう思給侍れはも、しきにゆきかひ

侍良无己止八満之天以止波、閑利於本久奈无可之  
侍らんことはましていとほ、かりおほくなんかし

【桐壺】 16左

己起於本世己止遠多比く、宇計給者利奈可良  
こきおほせことをたひく、うけ給はりなから

見徒可良八衣奈无思給部多川末之幾和可宮八  
みつからはえなん思給へたつましきわか宮は

以可尔於毛本之志留尔可末以利給者无己止遠能三  
いかにおもほししるにかまゐり給はんことをのみ

於本之以曾久女礼八己止八利尔可奈之宇美多天  
おほしいそくめれはことほりにかなしうみたて

末川利侍奈止宇知く、尔思比多末部留左満  
まつり侍なとうちく、に思ひたまへるさま

遠曾宇之給部由、之幾身仁侍連八閑久帝  
をそうし給へゆゝしき身に侍れはかくて

於八之末春毛以万く、之宇閑多之計奈久  
おはしますもいまく、しうかたしけなく

止乃多末不宮八於本止乃己毛利仁介利三多  
とのたまふ宮はおほとこのもりにけりみた

天末川利天久者之宇御安利左満毛曾宇之  
てまつりてくはしう御ありさまもそうし



【桐壺】 17右

侍良末本之幾遠末地於者之末春良无遠夜  
侍らまほしきをまちおはしますらんを夜

不計侍奴部之止天以曾久具礼未止不心能也三  
ふけ侍ぬへしとていそくくれまとふ心のやみ

毛多部可多幾可多波之遠多尔者留久者可利尔  
もたへかたきかたはしをたにはるくはかりに

幾已衣末本之宇侍遠和多久之尔毛心乃止可尔  
きこえまほしう侍をわたくしにも心のとかに

末可天給部止之已呂宇礼之久於毛堂之起  
まかて給へとしころうれしくおもたゝしき

川為天尔太知与利給比之物遠可、流御世宇  
つゐてにたちより給ひし物をかゝる御せう

曾己尔天美多天末川留返く、川礼奈幾以乃  
そこにてみためつる返くつれなきいの

知尔毛侍可奈武末礼之時与利毛思心安利之  
ちにも侍かなむまれし時よりも思心ありし

人尔天故大納言以末波止奈留末天堂、  
人にて故大納言いまはとなるまてたゝ

【桐壺】 17左

己乃人乃宮川可部乃本以可奈良春止計左世多  
この人の宮つかへのほいかならずとけさせた

天末川礼王連那久奈利奴止天久知遠之宇  
てまつれわれなくなりぬとてくちをしう

思久川遠留奈止返く、以左免遠可礼侍之可八  
思くつをるなと返くいさめをかれ侍しかは

者可く、之字宇之呂三思不人奈幾末之良飛  
はかくしうしろみ思ふ人なきましらひ

八中く、那留部幾古止、思不給部奈可良多、閑能  
は中くなるへきこと、思ふ給へなからたゝかの

由以己武遠多可衣之止者可利尔以多之太天侍  
ゆいこむをたかえしとはかりにいたしたて侍

之遠身仁安末留満天乃御心左之乃与呂川  
しを身にあまるまての御心さしのよろつ

仁可多之希那幾尔人氣奈幾波知遠可久之  
にかたしけなきに人けなきはちをかくし

川、末之良比給女流遠人乃曾祢三不可久徒  
つゝましらひ給めるを人のそねみふかくつ

【桐壺】18右

毛利也寸可良奴已止於本久奈利曾比侍類耳  
もりやすからぬことおほくなりそひ侍るに

与己佐末那留也宇尔天川為尔可久奈利侍怒  
よこさまなるやうにてつゐにかくなり侍ぬ

連八可部利天八川良久奈无可之已起御心左之遠  
れはかへりてはつらくなんかしこき御心さしを

思不給部侍己礼毛和利奈幾心乃也三尔奈武止  
思ふ給へ侍これもわりなき心のやみになむと

以比毛也良春武世可部利給本止耳夜毛不計  
いひもやらすむせかへり給ほとに夜もふけ

奴宇部毛志可奈无和可御心奈可良安奈可知尔人  
ぬうへもしかなんわか御心ながらあなかちに人

女遠止呂久者可利於本左礼之毛奈可、流末之  
めをとろくはかりおほされしもなかゝるまし

幾那利介利止以末八川良可利介留人能知幾里  
きなりけりといまはつらかりける人のちきり

仁奈无以左、閑毛人乃心遠末計多類己止盤  
になんいさゝかも人の心をまけたることは

【桐壺】18左

安良之止思不遠多、己乃人能由部尔天安末多  
あらしと思ふをたゝこの人のゆへにてあまた

佐留末之幾人乃宇良三越於比之者天く者  
さるましき人のうらみをおひしてくは

可宇打春天良連天心遠左女无可多奈起尔  
かう打すてられて心をさめんかたなきに

以止、人王呂宇閑多久奈仁奈利者部留毛左起  
いとゝ人わろうかたくなになりはへるもさき

乃世由可之宇奈无止宇知返之川、志本多礼可知  
の世ゆかしようなんとうち返しつゝしほたれかち

耳能三於者之末須止可多利天川幾世春那久  
にのみおはしますとかたりてつきせずなく

奈久夜八以多宇不計奴連八己与比寸久左  
なく夜はいたうふけぬれはこよひすくさ

寸御返曾宇世无止以曾幾末以留月者以利  
す御返そうせんといそきまいる月はいり

可多乃曾良幾与宇春見和多礼留尔風以止寸  
かたのそらきようすみわたれるに風いとす

【桐壺】 19右

春之久吹天久左武良乃武之能己恵く毛  
すしく吹てくさむらのむしのこ糸くも

与本之可保奈留毛以止多知波奈礼尔久幾草  
よほしかほなるもいとたちはなれにくき草

乃毛止那利  
のもとなり

寸、虫乃己恵乃可幾利遠川久之天毛奈可起  
す、虫のこ糸のかきりをつくしてもななき

夜安可春不留奈美多可奈衣毛乃利也良春  
夜あかすふるなみたかなえものりやらす

以止、之久虫乃年之介起安左知不尔露遠  
いと、しく虫のねしけきあさちふに露を

幾曾不留雲乃上人可己止毛起己衣徒部久  
きそふる雲の上人かこともきこえつへく

奈无止以者世給於可之幾御遠久利毛乃奈止  
なんといはせ給おかしき御をくりものなと

安留部幾於利仁毛安良祢八多、可乃御可多見  
あるへきおりにもあらねはた、かの御かたみ

【桐壺】 19左

尔止天可、流与宇毛也止乃己之給部利介留御  
にとてかかるともやとのこし給へりける御

佐宇曾久飛止久多利御久之安計乃天宇止  
さうそくひとくたり御くしあけのてうと

女久物曾部給王可幾人く可奈之幾己止八  
めく物そへ給わかき人くかなしきことは

佐良尔毛以者須内和多利遠安左由不尔奈良比  
さらにもいはす内わたりをあさゆふにならひ

天以止佐字く之久宇遍乃御安利左末那无止  
ていとさうくしくうへの御ありさまなんと

思日以天幾己由連八止久末以利給者无己止  
思ひいてきこゆれはとくまいり給はんこと

遠曾、乃可之起己由連止閑久以末く之起  
をそ、のかしきこゆれとかくいまくしき

身乃曾比多天末川良无毛以止人幾、宇可留  
身のそひたてまつらんもいと人き、うかる

部之又美多天末川良天志者之毛安良武者  
へし又みたてまつらてしはしもあらむは

【桐壺】20右

以止宇之路女多宇思比幾古衣給天寸可く  
いとうしろめたう思ひきこえ給てすかく

登毛衣末以良世太末川利多末者奴奈利  
ともえまいらせたてまつりたまはぬなり

介利命婦八末多於本止乃己毛良世給八左利  
けり命婦はまたおほとこのこもらせ給はさり

介留遠安八礼尔三多天末川留於末部乃徒本  
けるをあはれに見たてまつるおまへのつほ

世无左以乃以止於毛之路幾左可利奈留遠御  
せんさいのいとおもしろきさかりなるを御

覽寸留也宇尔天志乃比也可尔心尔久幾  
覽するやうにてしのひやかに心にくき

可幾利乃女房四五人左不良者世給天御毛乃  
かきりの女房四五人さふらはせ給て御もの

閑多利世左勢給奈利介利己乃古呂安計  
かたりせさせ給なりけりこのころあけ

久礼御覽寸留長恨歌乃御惠亭子院可く世  
くれ御覽する長恨歌の御系亭子院かくせ

【桐壺】20左

給天伊勢川良由幾尔与末世多末部留也満  
給て伊勢つらゆきによませたまへるやま

止古止乃者遠毛毛路己之乃宇多遠毛堂く  
とことのはをもろこしのうたをもたく

曾乃寸知遠曾末久良古止尔世左勢給以止  
そのすちをそまくらことにせさせ給いと

己末也可尔安利左末越止者世給安者連奈利  
こまやかにありさまをとほせ給あはれなり

川留己止志乃比也可耳曾宇春御返御覽  
つることしのひやかにそうす御返御覽

寸礼八以止毛可之己起八遠幾所毛侍良春かく  
すれはいともかしこきはをき所も侍らすかく

流於保世己止尔川計天毛可幾久良春三多利  
るおほせことにつけてもかきくらすみたり

心知耳奈武  
心ちになむ

安良幾風不世起之可計能可礼之与利己萩可  
あらし風ふせきしかけのかれしよりこ萩か

【桐壺】 21右

宇部曾志徒心奈幾奈止也宇尔美多利可波之幾  
うへそしつ心なきなどやうにみたりかはしき

遠心遠佐免佐利介留本止、御覽之由留春  
を心をさめさりけるほど、御覽しゆるす

部之以止可宇之毛美衣之止於本之志川武連  
へしいとかうしもみえしとおほししつむれ

止佐良尔衣之乃比安部左世給者須御良无之  
とさらにえしのひあへさせ給はず御らんし

者之免之止之月乃已止佐部可幾安徒免  
はしめしとし月のことさへかきあつめ

与呂川尔於本之川、遣良礼天時乃末毛於本  
よろつにおほしつ、けられて時のまもおほ

川可奈可利之遠閑久天毛月日八遍尔介利止  
つかなかりしをかくても月日はへにけりと

安左末之宇於保之女左留故大納言乃由以己  
あさましうおほしめさる故大納言のゆいこ

武安也末多須宮川可部乃本以不可久毛乃之  
むあやまたす宮つかへのほいふかくものし

【桐壺】 21左

多利之与呂己比八可比阿留左満尔止己曾於  
たりしよろこひはかひあるさまにとこそお

毛飛和多利川連以不可比奈之也止宇知乃多  
もひわたりつれいふかひなしやとうちのた

末波世天以止安者礼尔於本之也留可久天毛  
まはせていとあはれにおほしやるかくても

遠乃徒可良和可宮奈止遠比以天多末波、左留  
をのつからわか宮などをひいてたまは、さる

部幾川为天毛安利奈无以乃知奈可久止己曾  
へきつゐてもありなんいのちなかくとこそ

思日祢无世免奈止乃多末波春可能遠久利物  
思ひねんせめなどのたまはすかのをくり物

御覽世左寿奈幾人乃寸三可堂川祢以天  
御覽せさすなき人のすみかたつねいて

多利介武志留之乃可无左之奈良末之可波止  
たりけむしるしのかんさしならましかはと

於毛保春毛以止可比奈之  
おもほすもいとかなし

【桐壺】 22右

太川祢行末本呂之毛可奈川天尔天毛玉能  
たつね行まほろしもかなつてにても玉の

安利可遠曾己止之留部久絵尔可起多留楊貴妃  
ありかをそことしるへく絵にかきたる楊貴妃

能可多知八以美之幾惠之止以部止毛不天可起利  
のかたちはいみしきゑしといへともふてかきり

安利介礼八以止尔本比奈之大液芙蓉未央  
ありければいとほひなし大液芙蓉未央

柳毛遣尔閑与比多利之可多知遠可多女以  
柳もけにかよひたりしかたちをかためい

多留与曾比八字流者之字己曾安利氣免奈川  
たるよそひはうるはしうこそありけめなつ

閑之宇羅宇多計奈利之遠於本之以川留尔  
かしうらうたけなりしをおほしいつるに

花鳥能色尔毛祢尔毛与曾不部幾閑多曾  
花鳥の色にもねにもよそふへきかたそ

奈幾安左由不乃己止久左尔者年遠奈良遍  
なきあさゆふのことくさにはねをならへ

【桐壺】 22左

衣多遠可者佐无止知幾良世給之尔可奈八左利  
えたをかはさんとちきらせ給しにかなはさり

介流以乃知能本止曾川幾世春宇良免之幾風乃  
けるいのちのほとそつきせすうらめしき風の

遠止虫能年尔川計天物乃三可奈之字於本左  
をと虫のねにつけて物のみかなしうおほさ

流、耳弘徽殿尔八比左之久宇部乃御川本祢  
るゝに弘徽殿にはひさしくうへの御つほね

尔毛末宇乃本利給者須月乃於毛之路幾  
にもまうのほり給はず月のおもしろき

仁夜不久留末天安曾比遠曾志多末不奈留以止  
に夜ふくるまであそびをそしたまふなると

寸左満之字毛乃之止起己之女須己乃頃乃  
すさまじうものしときこしめすこの頃の

御介之幾遠見多天末川留宇部比止女房奈止  
御けしきを見たてまつるうへひと女房なと

八閑多波良以多之止起、介利以止遠之堂知  
はかたはらいたしとき、けりいとをしたち

【桐壺】 23右

可止く之幾所物之給御方仁天己止尔安良春  
かたくしき所物し給御方にてことにもあらず

於本之計知天毛天奈之給奈留部之月毛以利奴  
おほしけちてもてなし給なるへし月もいりぬ

雲乃上毛涙尔久類、秋乃月以可天

雲の上も涙にくる、秋の月いかて

春武良无安左知不乃屋止於本之女之屋利川、  
すむらんあさちふのやとおほしめしやりつ、

止毛之火越可、計川久之天於起遠八之末春  
ともし火をか、けつくしておきをはします

右近乃川可左乃止能井申乃己惠幾己遊

右近のつかさのとのお申のこゑきこゆ

流八字之尔那利奴留奈留部之人女遠於本之天  
るはうしになりぬるなるへし人めをおほして

与留乃遠止、仁以良世給天毛末止呂末世給  
よるのをと、にいらせ給てもまとろませ給

古止可多之阿之多尔於幾佐世給止天毛

ことかたしあしたにおきさせ給とても

【桐壺】 23左

安久留毛志良天止於毛本之以川留尔毛猶安左  
あくるもしらてとおもほしいつるにも猶あさ

末川利己止八於己多良世給奴遍可女利毛乃  
まつりことはおこたらせ給ぬへかめりもの

奈止毛起己之女佐春安左可礼比乃介之幾

なともきこしめさすあさかれひのけしき

者可利布礼左世給比天大志也宇之能於毛乃  
はかりふれさせ給ひて大しやうしのおもの

奈止八以止波留閑尔於本之女之多礼八者以世  
なとはいとほるかにおほしめしたれはいせ

武尔左不良布可幾利八心久留之幾御介之幾遠  
むにさふらふかきりは心くるしき御けしきを

美多末川利奈計久寸部天知可宇左不良布  
みたてまつりなけくすへてちかうさふらふ

可幾利八於止己女以止和利奈幾和左可奈止  
かきりはおとこ女いとわりなきわさかなと

以比安者世徒、奈計久佐留部幾知幾利己曾  
いひあはせつ、なけくさるへきちきりこそ

【桐壺】 24右

八於者之満之氣免曾己良乃人能曾之里宇良見  
はおはしましけめそこの人のそしりうらみ

遠毛波、閑良世給者須己乃御己止尔不礼多留  
をもは、からせ給はずこの御ことにふれたる

古止遠八堂宇里遠毛宇之奈者世給今波多可久  
ことをはたうりをもうしなはせ給今はたかく

世中乃事遠毛於本之寸天多留也宇尔奈利  
世中の事をもおほしすてたるやうになり

由久八以止多以く之幾和左奈利止人能三可止  
ゆくはいとたいくしきわさなりと人のみかと

乃多免之末天比幾以天佐、女幾奈計  
のためしまてひきいてさ、めきなけ

幾介利月日部天和可宮末以利給奴以止、己  
きけり月日へてわか宮まいり給ぬいと、こ

乃世能毛乃奈良春幾与良尔遠与春計給部  
の世のものならすきよらにをよすけ給へ

連八以止遊、之宇於本之多利安久留止之能者留  
れはいとゆ、しうおほしたりあくるとしのはる

【桐壺】 24左

坊左多満利給尔毛以止比幾己佐末本之宇  
坊さたまり給にもいとひきこさまほしう

於本世止御宇之呂三寸部幾人毛奈久又世能宇希  
おほせと御うしろみすへき人もなく又世のうけ

飛久末之起己止者利奈利介礼八奈可く安也  
ひくましきことはりなりければなかくあや

宇久於本之波、閑利天以路尔毛以多左世給  
うくおほしは、かりていろにもいたさせ給

者須奈利奴留遠左波可利於本之堂連止加  
はずなりぬるをさばかりおほしたれとか

幾利己曾阿利介礼止世乃人毛幾己衣女  
きりこそありけれと世の人もきこえ女

御毛御心知於知為多末比奴可乃御遠者北  
御も御心ちおちぬたまひぬかの御をは北

能可多奈久左武可多奈久於本之志川三天於  
のかたなくさむかたなくおほししつみてお

者春良无所尔多尔堂川祢由可无止年可比給之  
はすらん所にたにたつねゆかんとねかひ給し



【桐壺】 25右

志類之尔也徒為尔宇世給奴連八又己礼遠閑  
しるしにやつみにうせ給ぬれば又これをか

那之比於本寸己止可幾利奈之見己武徒丹  
なしひおほすことかきりなしみこむつに

奈利給止之奈礼八古乃多比八於本之志利天  
なり給としなればこのたひはおほしりて

古比奈幾給止之己呂奈礼武川飛幾古衣  
こひなき給としころなれむつひきこえ

給部留遠美多天末川利遠久可奈之比遠奈无  
給へるをみたてまつりをくかなしひをなん

返く乃多末比介留今八内尔乃三佐不良比給  
返くのたまひける今は内にのみさふらひ給

奈、徒尔奈利給部八布三者之女奈止世左世給  
な、つになり給へはふみはしめなとせさせ給

天世尔志良春佐止字可之己久於者寸連盤  
て世にしらすさとうかしこくおはすれば

安末利遠曾呂之幾末天御良无春以末波  
あまりをそろしきまで御らんすいまは

【桐壺】 25左

太連く毛衣尔久三給者之波、起三那久天  
たれくもえにくみ給はしは、きみなくて

堂尔羅宇多之給部止天弘徽殿奈止耳裳  
たにらうたし給へとて弘徽殿などにも

和多良世給御止毛尔八屋可天美春乃宇知尔以礼  
わたらせ給御ともにはやかてみすのうちにいれ

多天末川利給以三之起毛乃、婦乃安多可多  
たてまつり給いみしきもの、ふのあたかた

幾奈利止毛美天八字知衣末連奴部幾佐末乃  
きなりともみてはうちえまれぬへきさまの

志多末部連八衣佐之者奈知給者春女美己多知  
したまへればえさしはなち給はず女みこたち

布多所己乃御者良尔於者之末世止奈春良比  
ふた所この御はらにおはしませとなすらひ

給部幾多尔曾奈可利介留御可多く、毛閑久連  
給へきたにそなかりける御かたくもかくれ

給者春以末与利奈末女可之宇波川可之遣尔  
給はすいまよりなまめかしうはつかしけに

【桐壺】26右

於者春礼八以止遠可之宇打止計奴安曾飛久  
おはすれはいとをかしう打とけぬあそひく

左尔堂礼毛く思比幾古衣太末部利和左止  
さにたれもく思ひきこえたまへりわさと

乃御可久毛无八佐留毛乃尔天已止不惠乃祢尔  
の御かくもんはさるものにてことふゑのねに

毛雲為越比、閑之春部天以比川、氣八已  
も雲ゐをひ、かしすへていひつ、けはこ

止く之宇宇多天曾奈利奴部幾人乃御  
とくしううたてそなりぬへき人の御

佐末那利介流曾乃己路己満宇止乃末以礼留  
さまなりけるそのころこまうとのまいれる

可奈可尔閑之己幾佐宇尔无阿利介留遠幾  
かなかにかしこきさうにんありけるをき

古之免之天宮乃宇知尔女佐武己止八字多能  
こしめして宮のうちにめさむことは宇多の

美可止乃御以末之免安連者以美之宇志乃比天  
みかとの御いましめあれはいみしうしのひて

【桐壺】26左

己乃美己遠己宇路久王无尔川可八之多利御宇之呂  
このみこをこうろくわんにつかはしたり御うしろ

三太知天川可宇末川留右大弁乃己能也宇耳  
みたちてつかうまつる右大弁のこのやうに

於毛者世天為天多末川留相人於止呂幾  
おもはせてゐてたてまつる相人おとろき

天安末多太比可多不幾安屋之不久尔乃於  
てあまたたひかたふきあやしふくにのお

也止奈利天帝王乃可三奈幾久良為尔乃本類  
やとなりて帝王のかみなきくらゐにのほる

部幾佐宇於八之満春人乃曾那多尔天三礼者  
へきさうおはします人のそなたにてみれば

美多礼宇礼布留古止也阿良无於本也氣乃可多  
みたれうれふることやあらんおほやけのかた

女止奈利天天下遠堂春久流可多尔天見礼者  
めとなりて天下をたすくるかたにて見れば

又曾乃佐宇多可不遍之止以不弁毛以止佐衣  
又そのさうたかふへしといふ弁もいとさえ

【桐壺】 27右

可之古幾者可世尔天以比可者之多留古止、毛  
かしこきはかせにていひかはしたること、も

奈无以止氣宇阿里介利布三那止川久利可八之  
なんいとけうありけりふみなとつくりかはし

天介不安春可部利佐利奈无止寸留尔可久安利可多  
てけふあすかへりさりなんとするにかくありかた

幾人尔太以女武之多利与路己比可遍利天八  
き人にたいめむしたりよろこひかへりては

閑那之可留部幾心者部遠於毛之路久川久利  
かなしかるへき心はへをおもしろくつくり

多留尔見己毛以止安者礼奈留久遠徒久利給  
たるにみこもいとあはれなるくをつくり給

部留遠可起利奈宇女天多末川利天以三之起  
へるをかきりなうめてたてまつりていみしき

於久利物止毛遠佐、遣多末川留於本也遣  
おくり物ともをさゝけたてまつるおほやけ

与利毛於本久毛乃多末波春於乃徒可良古止  
よりもおほくものたまはすおのつからこと

【桐壺】 27左

比呂己利天毛良佐世給者年止春宮乃於本  
ひろこりてもらさせ給はねと春宮のおほ

知遠止、那止以可奈留古止尔可止於本之宇多可飛  
ちをとゝなといかなることにかとおほしうたかひ

天奈无介留美可止閑之古幾御心尔也未止左宇越  
てなんけるみかとかしこき御心にやまとさうを

於本世天於本之与利尔介留寸知奈礼八以末  
おほせておほしよりにけるすちなれはいま

末天己乃君遠美己尔毛奈佐世給者左利介留  
までこの君をみこにもなさせ給はさりける

越相人八万己止尔可之己閑利（計里）止於本之天無品  
を相人はまことにかしこかり（けり）とおほして無品

親王乃外尺農与世奈幾尔天八多、与者  
親王の外尺のよせなきにてはたゝよは

左之和可御世毛以止佐多女奈幾遠多、人尔  
さしわか御世もいとさためなきをたゝ人に

天於本也遣乃御宇之呂三遠寸留奈无由久左起毛  
ておほやけの御うしろみをするなんゆくさきも

【桐壺】28右

太乃毛之氣奈女留古止、於本之左多免天以  
たのもしけなめること、おほしさをためてい

与く美知く能佐衣遠奈良者世給幾者己  
よくみちくのさえをならはせ給きはこ

止尔閑之古久天多、人尔八以止安多良之介礼  
とにかしこくてた、人にはいとあたらしけれ

止美己止奈利多末比奈八世乃宇多可比於比給  
とみことなりたまひなは世のうたかひおひ給

比奴遍久毛乃之給部八寸久衣宇乃可之己起  
ひぬへくものし給へはすくえうのかしこき

道乃人尔可武閑部左世給尔毛於奈之左末尔  
道の人にかむかへさせ給にもおなしさまに

申世波源氏尔奈之多天末川留部久於本之  
申せは源氏になしたてまつるへくおほし

遠起天多利止之月尔曾部天三也春所乃  
をきてたりとし月にそへてみやす所の

御事遠於本之和寸留、於利奈之奈久左武  
御事をおほしわする、おりなしくさむ

【桐壺】28左

也止佐留部幾人く遠満以良世給部止奈春良  
やとさるへき人くをまいらせ給へとなすら

比尔於本左留、太尔以止可多起与可奈止宇止末  
ひにおほさる、たにいとかたきよかなとうとま

之字能三与路徒尔於本之奈利奴留尔先帝  
しうのみよろつにおほしなりぬるに先帝

乃四能宮乃御可多知寸久礼給部留幾己衣多  
の四の宮の御かたちすくれ給へるきこえた

可久於八之末春波、幾佐幾世尔那久可之川幾  
かくおはしますは、きさき世になくかしつき

起己衣給遠宇部尔佐不良布内仕乃春遣八先  
きこえ給をうへにさふらふ内仕のすけは先

帝乃御時能人尔天可乃宮尔毛志多之宇  
帝の御時の人にてかの宮にもしたしう

末以利奈礼多利介礼八以者計奈久於者之満  
まいりなれたりければいはけなくおはしま

志、時与利美多天末川利今毛本能見多天  
し、時よりみたてまつり今もほの見たて

【桐壺】 29右

末徒利天宇世給尔之三也寸所乃御可多知尔、  
まつりてうせ給にしみやす所の御かたちに、

太末部留人遠三代乃宮徒可部尔徒多者利  
たまへる人を三代の宮つかへにつたはり

奴留尔衣見多末末川利徒希奴尔幾左以乃  
ぬるにえみたてまつりつけぬにきさいの

宮乃比免宮己曾以止与宇於本衣天於飛以  
宮のひめ宮こそいとようおほえておひい

天佐世給部利介礼安利可多起御可多知人耳  
てさせ給へりけれありかたき御かたち人に

奈无止曾宇之介留尔末古止尔也止御心止末利天  
なんとそうしけるにまことにやと御心とまりて

祢无己路耳起己衣佐勢給希利者、起左  
ねんころにきこえさせ給けりは、きさ

幾安奈於曾呂之也春宮乃女御乃以止左可奈  
きあなおそろしや春宮の女御のいとさかな

久天幾利徒本乃更衣乃安良者尔者可奈久  
くてきりつほの更衣のあらはにはかなく

【桐壺】 29左

毛天奈左礼之多免之毛遊、之宇止於本之  
もてなされしためしもゆ、しうとおほし

川、美天寸可く之宇毛於本之多、佐利介留  
つ、みてすかくしうもおほした、さりける

本止尔幾佐幾毛宇世給比奴心本曾幾佐  
ほとにきさきもうせ給ひぬ心ほそきさ

末尔天於者之末寸尔多、和可女美己多知止  
まにておはしますにた、わか女みこたちと

於奈之徒良尔思日幾古衣无止以止祢无己呂尔  
おなしつらに思ひきこえんといとねんころに

幾古衣左世給左不良布人、御宇之呂三堂  
きこえさせ給さふらふ人、御うしろみた

知御世宇止乃兵部卿乃美己奈止閑久心本  
ち御せうとの兵部卿のみこなとかく心ほ

曾久天於八之末佐武与利八内春三世佐勢  
そくておはしまさむよりは内すみせさせ

給天御心毛奈久佐武部久奈止於本之奈利天  
給て御心もなくさむへくなどおほしなりて

【桐壺】 30右

末以良世太末川利給部利藤川本止幾已遊  
まいらせたてまつり給へり藤つほときこゆ

計尔御可多知安利左満安屋之幾末天曾於本  
けに御かたちありさまあやしきまでそおほ

衣給部留己礼八人乃御幾八満左利天於毛飛  
え給へるこれは人の御きはまさりておもひ

奈之女天多久人毛衣於止之免幾己衣給者  
なしめてたく人もえおとしめきこえ給は

祢八字計者利天安可奴己止奈之可連八人乃遊  
ねはうけはりてあかぬことなしかれは人のゆ

流之幾己衣佐利之尔御心左之安屋尔久奈利  
るしきこえさりしに御心さしあやにくなり

之曾閑之於本之末起留止八奈計連止遠乃  
しそかしおほしまきるとはなけれどをの

川可良御心宇川呂比天古与奈宇於本之奈久  
つから御心うつるひてこよなうおほしなく

左武也宇奈留毛安八礼奈留和左奈利介利源氏  
さむやうなるもあはれなるわさなりけり源氏

【桐壺】 30左

乃幾見八御安多利佐利給者奴遠末之天志  
のきみは御あたりさり給はぬをましてし

氣久和多良世給御可多八衣者知阿衣多末者  
けくわたらせ給御かたはえはちあえたまは

寸以川連乃御可多毛我人尔於止良武止於本  
すいつれの御かたも我人におとらむとおほ

以多留也八安奈止利く尔以止女天多介礼止  
いたるやはあなとりくいにいとめてたけれど

宇知於止奈比多末衣留耳以止和可宇宇川久  
うちおとなひたまえるにいとわかうつく

之計尔天世知尔可久礼給部止遠乃徒可良  
しけにてせちにかくれ給へとをのつから

毛利美多末川留者、見也春所八可計多尔  
もりみたてまつるは、みやす所はかけたに

於保衣給者奴遠以止与宇尔多末部利止内侍  
おほえ給はぬをいとよ用にたまへりと内侍

乃春遣乃幾古衣介留遠王可起御古、知耳  
のすけのきこえけるをわかき御こ、ちに

【桐壺】 31右

以止安者礼止思幾古衣給天川祢尔末以良末  
いとあはれと思きこえ給てつねにまいらま

本之久奈徒左比三多天末川良者也止於本衣給  
ほしくなつさひみたてまつらはやとおほえ給

宇部毛可幾利奈幾御於毛比止知尔天奈宇  
うへもかきりなき御おもひとちにてなう

止三給曾安屋之久与曾部幾己衣徒部幾心知  
とみ給そあやしくよそへきこえつへき心ち

奈无寸留奈女之止於本左天羅宇多宇之給部  
なんするなめしとおほさてらうたうし給へ

川良徒幾満三奈止八以止与宇尔多利之由部可与比  
つらつきまみなどはいとようにたりしゆへかよひ

天美衣給毛仁気奈可良春奈武奈止起古衣  
てみえ給もにけなからすなむなときこえ

川計給部連八於左奈心知尔毛波可奈幾花毛  
つけ給へれはおさな心ちにもはかなき花も

見知尔川遣天毛心左之遠美衣多天末川利  
みちにつけても心さしをみえたてまつり

【桐壺】 31左

古与奈宇心与世幾古衣多部連八弘徽殿  
こよなう心よせきこえたまへれは弘徽殿

乃女御又己乃宮止毛御奈可曾者く之起  
の女御又この宮とも御なかそはくしき

由部宇知曾部天毛止与利能尔久左毛多知以天  
ゆへうちそへてもとよりのにくさもたちいて

天物之止於本之多利与尔多久比奈之止美多  
て物しとおほしたりよにたくひなしとみた

天末川利多末比名多可宇於者春留宮乃御  
てまつりたまひ名たかうおほする宮の御

可多知尔毛奈越尔本者之左八多止部无可多那久  
かたちにもなをにほはしさはたとへんかたなく

宇徒久之気奈留遠世乃人比可留君止起己遊  
うつくしけなるを世の人ひかる君ときこゆ

不知川本奈良比御於本衣毛止利く奈連盤  
ふちつほならひ御おほえもとりくなれば

閑く屋久日乃宮止幾己遊己能君能御和良八  
かやく日の宮ときこゆこの君の御わらは

【桐壺】 32右

寸可多以止可部末宇久於本世止十二尔天御元服  
すかたいとかへまうくおほせと十二にて御元服

之太末不為多知於本之以止奈三天可起利安流  
したまふゐたちおほしいとなみてかきりある

己止尔事遠曾部佐世給不比止、世乃東宮農  
ことに事をそへさせ給ふひと、せの東宮の

御元服南殿尔天安利之幾之起乃与曾本之  
御元服南殿にてありしきしきのよそほし

閑利之御比、幾尔於止左世多末者須所く能  
かりし御ひゝきにおとさせたまはず所くの

饗奈止久良川可左古久左宇為无奈止於本也氣  
饗なとくらつかさこくそうゐんなどおほやけ

事尔川可宇末川礼留遠呂曾可那留己止毛曾止  
事につかうまつれるをろそかなることもそと

止利和幾於本世己止阿利天幾与良遠川久之  
とりわきおほせことありてきよらをつくし

天川可宇末川礼利於者之末春殿能日无可之乃  
てつかうまつれりおはします殿のひんかしの

【桐壺】 32左

比左之飛无可之武幾仁以之多天、久王无左能  
ひさしひんかしむきにいたて、くわんさの

御左比幾入農大臣乃御左御前尔阿利左留  
御さひき入の大臣の御さ御前にありさる

乃時尔天源氏末以利給三徒良由比給部留  
の時にて源氏まいり給みつらゆひ給へる

川良徒幾可本乃耳本比左満可部多末八无己止  
つらつきかほのにはひさまかへたまはんこと

於之遣奈利大藏卿藏人川可宇末川留以止幾  
おしけなり大藏卿藏人つかうまつるいとぎ

与良奈留御久之遠曾久本止以止心久留之計奈流  
よらなる御くしをそくほといと心くるしけなる

遠宇部八御息所乃三末之可波止於本之以川留尔  
をうへは御息所のみましかはとおほしいつるに

堂部可多起遠心川与久祢无之可部左世多末不  
たへかたきを心つよくねんしかへさせたまふ

閑宇婦利之給比天御也寸三所尔満可天  
かうふりし給ひて御やすみ所にまかて



【桐壺】 33右

給天御曾多天末川利可部天於利天者以之  
給て御そたてまつりかへておりてはいし

多天末川利給不左満尔三奈人那三多於止之給  
たてまつり給ふさまにみな人なみたおとし給

美可止八末之天衣忍比安部多末八須於本之末  
みかとはましてえ忍ひあへたまはずおほしま

幾留、於利毛安利川留昔乃已止利可部之可奈之  
きる、おりもありつる昔のことりかへしかなし

久於本佐留以止可宇幾比王奈留保止八安計遠止  
くおほさるいとかうきひわなるほとはあけをと

里也止宇多可波之久於本左礼川留遠阿左末之宇  
りやとうたかはしくおほされつるをあさましう

宇川久之遣左曾比給部利飛幾以礼乃大臣能三古  
うつくしけさそひ給へりひきいれの大臣のみこ

者良尔多、比止利可之川幾給不御武春免春宮  
はらにた、ひとりかしつき給ふ御むすめ春宮

与利毛御介之幾安留遠於本之和川良布事阿利  
よりも御けしきあるをおほしわつらふ事あり

【桐壺】 33左

介留八己乃君尔太天末川良无乃御心奈利介利内  
けるはこの君にたてまつらんの御心なりけり内

仁毛御介之幾給者良世多末比介礼八左良八己能  
にも御けしき給はらせたまひければさらはこの

於利乃宇之呂三奈可免留遠曾比布之尔毛止毛与  
おりのうしろみなかめるをそひふしにもともよ

遠佐勢給比介礼八左於本之多利左不良比尔末可  
をさせ給ひければさおほしたりさふらひにまか

天給天人、於本三幾奈止末以留本止見己  
て給て人、おほみきなとまいるほとみこ

多知乃御左乃春惠尔源氏川幾給部利於止、  
たちの御さのすゑに源氏つき給へりおと、

介之幾波三起己衣給不己止安礼止毛乃徒、末  
けしきはみきこえ給ふことあれともものつ、ま

之幾本止尔天止毛可久毛衣安比志良比幾己  
しきほとにてともかくもえあひしらひきこ

衣給者春御前与利内侍宣旨宇計給者利徒多  
え給はず御前より内侍宣旨うけ給はりつた

【桐壺】 34右

遍天於止、末以利給部幾女之安礼八末以利給  
へておとゝまいり給へきめしあれはまいり給

御路久乃物宇遍乃命婦止利天多末不志呂幾  
御ろくの物うへの命婦とりてたまふしろき

於本字知幾尔御曾比止久多利連以乃己止奈利  
おほうちきに御そひとくたりれいのことなり

御左可川幾乃徒以天耳  
御さかつきのついでに

以止幾奈起者川毛止由比尔奈可幾世越知  
いときなきはつもとゆひになかき世をち

幾留心八武春比己免徒也止御心者部安利天  
きる心はむすひこめつやと御心はへありて

於止呂可左世多末婦  
おとろかさせたまふ

結比川留心毛不可幾毛止由比尔己起武良  
結ひつる心もふかきもとゆひにこきむら

左起乃色之安世春波止曾宇之天奈可波之  
さぎの色しあせすはとそうしてなかはし

【桐壺】 34左

与利於利天婦多宇之給比多利乃川可左能御  
よりおりてふたうし給ひたりのつかさの御

武末久良人所乃堂可春惠天太末者利給  
むまくら人所のたかすゑてたまはり給

見者之乃毛止尔美己多知可无多知女川良祢  
みはしのもとにみこたちかかんたちめつらね

天呂久止毛志奈く、尔太末者利給曾乃日能  
てろくともしなくにたまはり給その日の

於末部乃於利比徒毛乃己毛乃奈止右大弁  
おまへのおりひつものこものなと右大弁

奈无宇計給者利天川可宇末川良世介留止无之  
なんうけ給はりてつかうまつらせけるとんし

幾呂久乃可良比川止毛奈止所世幾末天春  
きろくのからひつともなと所せきまて春

宮乃御元服乃於利尔毛可春末左礼利奈可  
宮の御元服のおりにもかすまされりなか

奈可閑幾利毛那久以可女之宇奈无曾乃夜  
なにかきりもなくいかめしうなんその夜

【桐壺】 35右

於止、乃御左止尔源氏乃幾見末可天左世給  
おとゝの御さとに源氏のきみまかてさせ給

左本不世尔女川良之幾末天毛天閑之徒幾  
さほふ世にめつらしきまてもてかしつき

幾己衣給部利以止幾比者尔天於八之多留越  
きこえ給へりいとときひはにておはしたるを

由、之宇宇川久之止思日起己衣給部利女君者  
ゆゝしううつくしと思ひきこえ給へり女君は

寸己之寸久之給部留本止尔以止和可宇於者寸礼八  
すこしすくし給へるほどにいとわかうおはすれば

尔計奈久者川可之止於本以多利己乃於止、乃御  
にけなくはつかしとおほいたりこのおとゝの御

於本衣以止也武己止奈起尔者、宮内乃比止  
おほえいとやむことなきには、宮内のひと

徒幾左以者良尔奈无於者之介礼八以徒閑多尔  
つきさいはらになんおはしければいつかたに

川計天毛物安左也可奈留尔己乃君左部閑久於  
つけても物あさやかなるにこの君さへかくお

【桐壺】 35左

者之曾比奴連八春宮乃御於保知尔天川為尔  
はしそひぬれは春宮乃御おほちにてつゐに

世中遠志利給部幾右農於止、乃御以起遠  
世中をしり給へき右のおとゝの御いきを

比八毛乃尔毛安良春於左礼給部利御子止毛  
ひはものにもあらずおされ給へり御子とも

安末多波良く、尔物之多末不宮乃御者良八  
あまたはらくに物したまふ宮の御はらは

藏人少将尔天以止和可宇於可之幾越右乃  
藏人少将にていとわかうおかしきを右の

於止、乃御奈可八以止与可良祢止衣美春久之  
おとゝの御なかはいとよからねとえみすくし

給者天可之川幾給四乃君尔安者世給部利  
給はてかしつき給四の君にあはせ給へり

於止良春毛天可之徒幾多留八安良末本之幾  
おとらすもてかしつきたるはあらまほしき

御安者比止毛尔奈无源氏乃君八宇部能川祢尔  
御あはひともになん源氏の君はうへのつねに

【桐壺】 36右

女之末川者世八心屋春久佐止春見毛衣之給  
めしまつはせは心やすくさとすみもえし給

者須心乃宇知尔八堂、藤川本乃御安利左末遠  
はず心のうちにはた、藤つほの御ありさまを

多久比奈之止思日起己衣天左也宇奈良无人  
たくひなしと思ひきこえてさやうならん人

遠己曾見尔留人奈久毛於者之介留可奈於  
をこそみめる人なくもおほしけるかなお

本以止能、幾見以止於可之計尔可之川可礼多留人  
ほいとの、きみいとおかしけにかしつかれたる人

止八三由連止心尔毛川可春於保衣給天於左奈  
とはみゆれと心にもつかすおほえ給ておさな

幾本止乃御比止部心尔可、里天以止久留之起  
きほどの御ひとへ心にかゝりていとくるしき

末天曾於本之介留於止奈尔那利給天乃知八  
までそおほしけるおとなになり給てのちは

安利之也尔美春乃宇知尔毛以礼多末波春  
ありしやうにみすのうちにもいれたまはず

【桐壺】 36左

御安曾比乃於利く己止不衣能年尔起、可与比  
御あそひのおりくことふえのねにき、かよひ

本乃可奈留御己惠遠奈久左免尔天内春三能三己乃  
ほのかなる御こゑをなくさめにて内すみのみこの

末之宇於本衣給五六日左不良比天於本以止能尔二三  
ましうおほえ給五六日さふらひておほいとのに二三

日奈止多衣く満可天給部止多、今八於左奈幾御本  
日などたえくまかて給へとた、今はおさなき御ほ

止尔与呂川、三那久於本之奈之天以止奈三可之川幾幾  
とよろつ、みなくおほしなしていとなみかしつきき

己衣給御可多く、乃人く世中尔於之奈部多良奴遠  
こえ給御かたくの人く世中におしなへたらぬを

衣利止、能部春久利天左不良者世給御心尔徒久  
えりと、のへすくりてさふらはせ給御心につく

部幾御安曾比遠之於保奈く於本之以多川久  
へき御あそひをしおほなくおほしいたつく

宇知尔八毛止能淑景舍遠御左宇之尔天者、三也春  
うちにはもとの淑景舍を御さうしにては、みやす

【桐壺】 37右

所乃御可多く能人く末可天知良春佐不良者世給左止  
所の御かたくの人くまかてちらすさふらはせ給さと

乃殿八修理職多久三川可左尔宣旨久多利天尔奈  
の殿は修理職たくみつかさに宣旨くたりてにな

宇安良多女川久良世給毛止能己多知山能多く寸末比  
うあらためつくらせ給もとのこたち山のたくすまひ

於毛之呂幾所奈留遠池乃心比呂久志奈之天  
おもしろき所なるを池の心ひろくしなして

女天多久徒久利乃く志留閑く流所尔於毛不也宇奈良  
めてたくつくりのくしるかくる所におもふやうなら

武人遠寸部天寸末者也止乃三奈計可之宇於  
む人をすへてすまはやとのみなけかしうお

本之和多留比可留君止以不名八己末宇止能女天起  
ほしわたるひかる君といふ名はこまうとのめてき

古衣天川計多天末川利介留止曾以比徒多部多流止奈武  
こえてつけたてまつりけるとそいひつたへたるとなむ